

北海道のマメ科を描く（その 1）

通信では「スケッチ観察」と称して、植物の形態や描き方のヒントを紹介してきたのですが、会社設立後はスケッチのヒマもろくになく(笑)、話題提供も出来ぬままでした。しかし設立前の 1997 年～ 2000 年には、いろいろなスケッチを描きためており、いまだ紹介していないものも多いので、ちょっとずつ蔵出して紹介していこうと思っています。今回は十分に整理していないのでスケッチブックそのまま恐縮ですが、道内のマメ科についてです。

■ マメ科の特徴

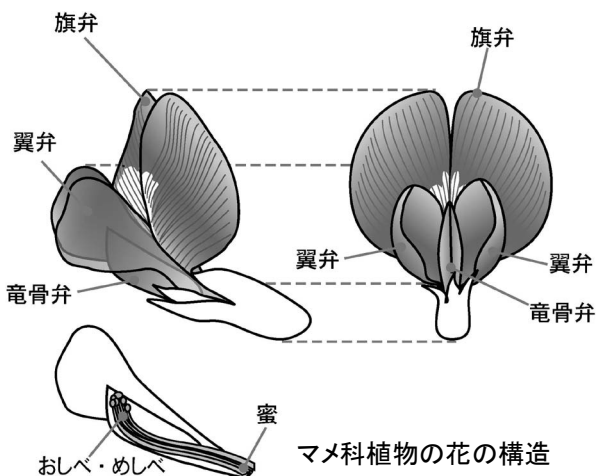
私は、主に「葉で見分ける北海道の植物」というテーマでスケッチをためていますが、そのときにターゲットとしているのが「グループとしてはまとまっていて分かりやすい」が「グループ内に種類が多くて見分けが太変」という仲間です。今回のターゲットであるマメ科はそれにピッタリ当てはまります。特徴を言おうとすると、「マメの花が咲き、マメの実がなり、小葉に分かれた葉を持つグループ」とでもなりましょうか(笑)、マメの仲間としかいいようがない特徴的な花と実を持ちますが、道内に 50 種以上もいて、初心者は名前を覚えるのがや

や大変なグループです。牧草など有用植物が多く、外来種が非常に多いのも特徴です。同定が特に難しいということはないのですが、描いて楽しい植物でもあるので、スケッチ観察にはもってこいです。ほとんどの種が草原性で、高山植物も多く、開放的なフィールドを満喫しながらスケッチする植物群といえましょう。

■ 花を観察する

植物の見分けは花や実に基づくことが多いですが、マメ科の場合、花の形態がポイントになることはあまりありません。「蝶形花」とも呼ばれる特徴的な花ですが、一つ一つの花はどの種も大変よく似ているためです。むしろクローバーのように一見マメ科っぽくない花が、よく見るとマメらしいのに感心するくらいです。花については、大きさや花序につく数、色などが同定ポイントになります。

さて、まずは花の構造を確認しましょう(図)。花びらは 5 枚あり、左右対称になっています。上側の一番大きいものを「旗弁」と呼び、下側に左右に 1 枚ずつあるものを



マメ科植物の花の構造

三小葉	つるタイプ	● ヤブマメ	▼ ツルマメ	● クズ
	直立タイプ	● エゾヤマハギ ● メドハギ	● センダイハギ ● ヤブハギ	● ヌスビトハギ ▼ ヤハズソウ
	クローバー	外 ムラサキツメクサ 外 コメツブツメクサ	外 シロツメクサ 外 クスダマツメクサ	外 タチオランダゲンゲ
	ギザギザあり	外 ムラサキウマゴヤシ 外 シナガワハギ	外 コメツブウマゴヤシ 外 コゴメハギ	
五小葉	つるタイプ	▼ ホドイモ		
	直立タイプ	● シャジクソウ	● ミヤコグサ	外 セイヨウミヤコグサ
掌状		外 ルピナス		
偶数羽状 複葉	まきひげ あり	● クサフジ ● ツルフジバカマ ● ハマエンドウ	● ヒロハクサフジ ● エゾノレンリソウ ▼ イタチササゲ	外 ピロードクサフジ ▲ オオバクサフジ ▲ ヤハズエンドウ
	ひげなし	● ナンテンハギ	▲ ツガルフジ	▲ ヨツバハギ
	細かい	▲ クサネム		
奇数羽状 複葉	草本	▲ エゾオヤマノエンドウ ▲ リシリゲンゲ ● カラフトモメンヅル ▲ エゾモメンヅル ▲ タイツリオウギ ▲ イワオウギ	▲ ヒダカミヤマノエンドウ ▲ マシケゲンゲ ● モメンヅル ▲ カリバオウギ ▲ トカチオウギ ▲ カラフトゲンゲ	▲ レブンソウ ▲ オカダゲンゲ ▼ ムラサキモメンヅル ▲ リシリオウギ ▲ チシマゲンゲ
		外 イタチハギ	外 フジ	
	低木・つる			
	樹木	● イヌエンジュ	外 ハリエンジュ	

※「●」は全道にある種、「▲」は分布が限られる種、「▼」は特に道南のみの種、「外」は外来種

「翼弁」「竜骨弁」と呼びます。しべは外からは全く見えず、竜骨弁を合わせて出来た筒のような形の中に収められています。ただ、この筒は合弁花のようにしっかりしたものではなく、各花びらの付け根は細くなっていて、昆虫が上に乗って押し下げるとしべが簡単に竜骨弁の間から出てくるようになっていきます。

つまり、この花は典型的なハナバチ専用の花で、他の昆虫に蜜や花粉を採られることを防ぐ仕組みがあるわけです。多くの花が紫色なのも、ハナバチ媒花であることと関係あるのかもしれません。

この花、種によってはついている数が多くて、スケッチは結構大変なときがあります。ただ下の4枚がほとんど重なっているため、2枚の花びらとして描けば、結構簡

単に描けてしまいます。旗弁が立体的に折れているところにだけ注意すれば、それらしく描けるようになります。もっとも旗弁は野生種ではそれほど大きくなく、特に目立つのは最初のイラストで使ったエゾオヤマノエンドウなど数種だけかもしれません（蝶らしく見える花はほとんどない気がしますな）。

■葉の観察ポイント

次に葉のスケッチの際のポイントについてまとめてみたいと思います。マメ科の葉のパターンを整理したのが表1です。マメ科のほとんどは丸みのある全縁の小葉に分かれた葉を持っていますが、小葉の枚数は

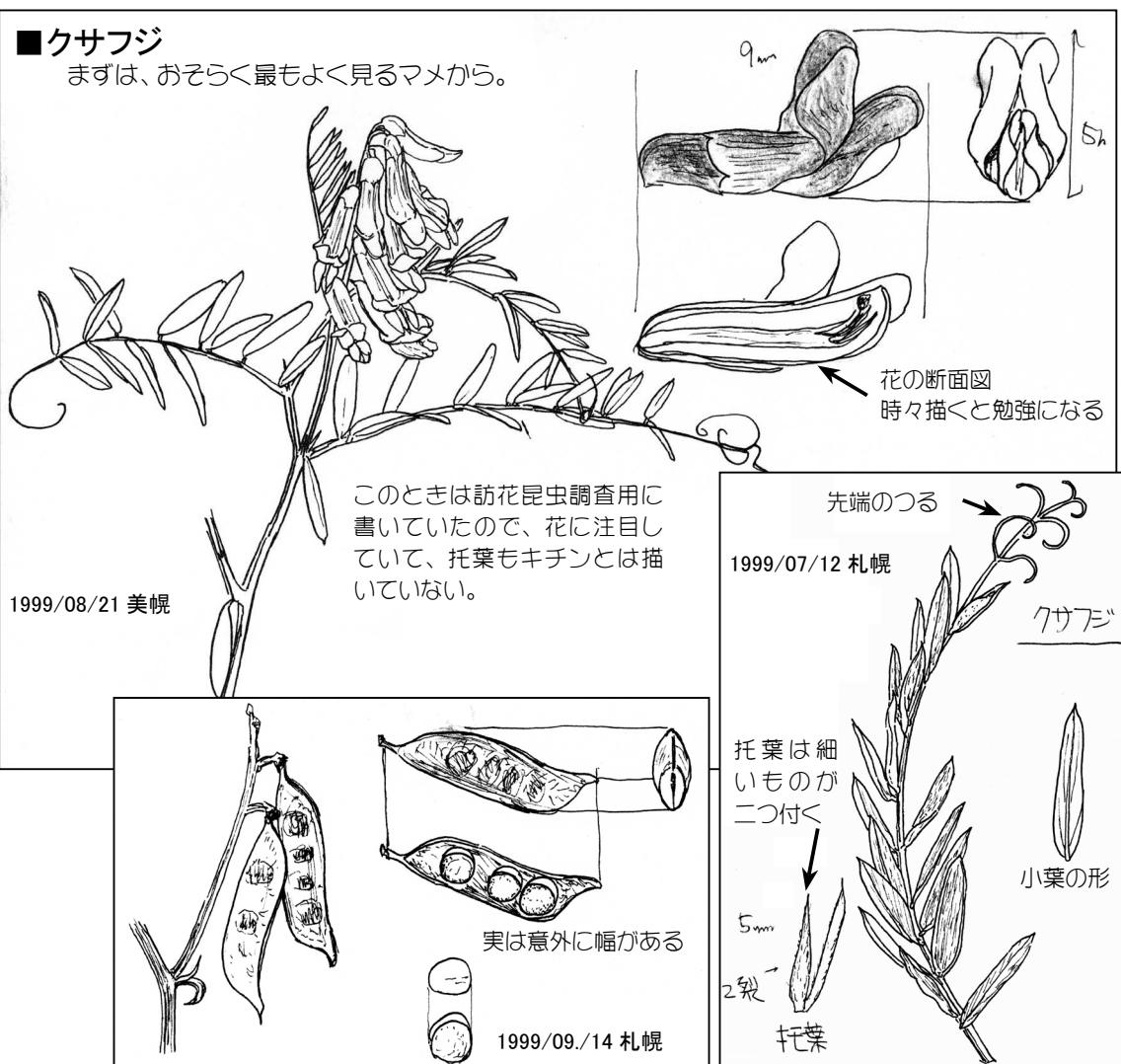
種によって大きく異なります。大きく、偶数か奇数かに分かれ、奇数の場合は少ないと三小葉や五小葉になります。偶数のものは、要するに先端にあるべき頂小葉がないのですが、大抵はこれがまきひげに変化しています（偶数でまきひげを全く持たないのはナンテンハギとツガルフジだけです）。まきひげの先の割れ方も注意しましょう。また、小葉の枚数以外にも、小葉の幅や先端の丸み、付く間隔等も、それらしく描くには重要で、同定ポイントでもあります。表を見ると、奇数羽状複葉の草本類が最も種数が多く、見分けるのが大変のように見えますが、このグループはいずれも分布が

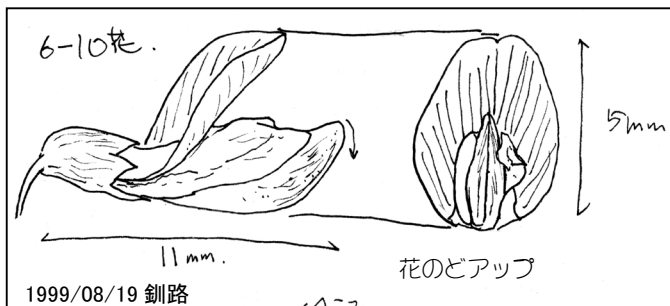
極めて限られるので、実際にはそんなに悩むことはないでしょう。ちなみにここに挙げた17種は、なんと全てが北海道のRDBに指定されています（マメ科の指定種は全て奇数羽状複葉です）。

そして、さらに同定に関わるスケッチポイントとして「托葉」があります。マメ科のほとんどの種の葉の基部には托葉がついており、さまざまな形が見られます。センダイハギのように小葉にしか見えないものもあります。忘れずに（笑）描いておきます。それでは、具体的なスケッチブックの作品（ホントにそのまま）を紹介させていただきます。

■クサフジ

まずは、おそらく最もよく見るマメから。





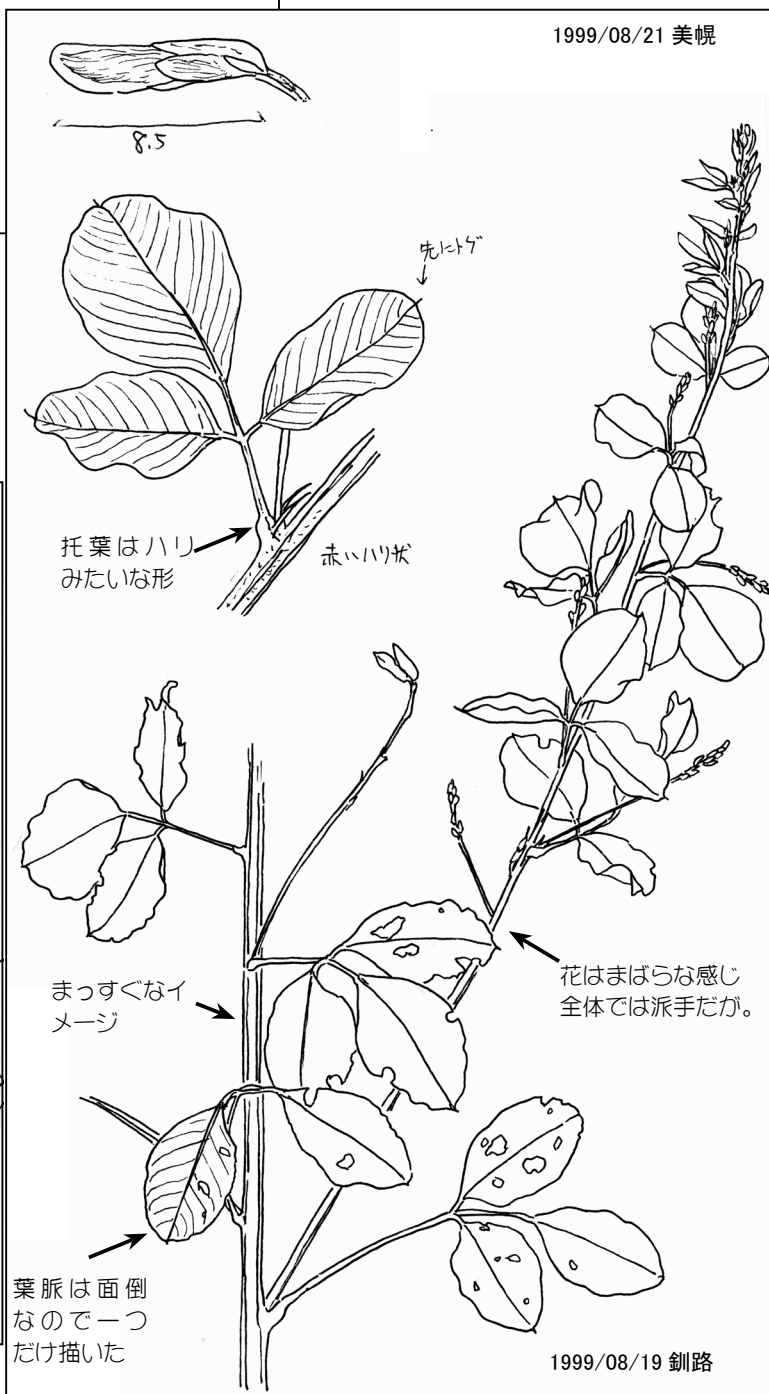
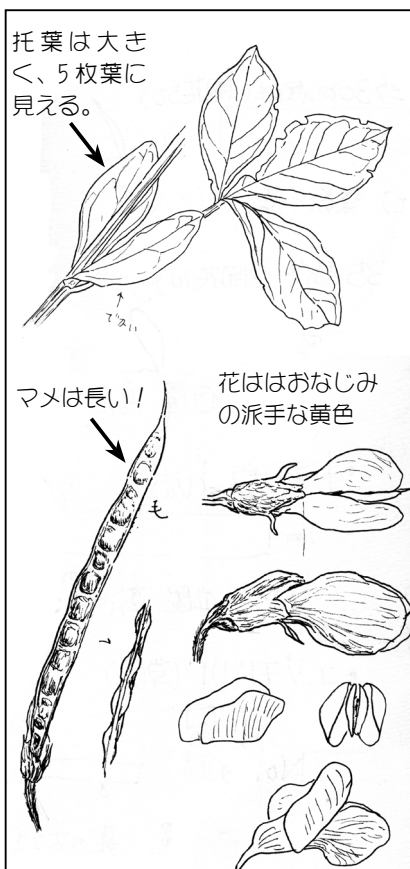
■エゾヤマハギ

三つ葉の代表選手ということで。枝がたくさん出ているので、採集して整理しないと描きにくいかもしれない。



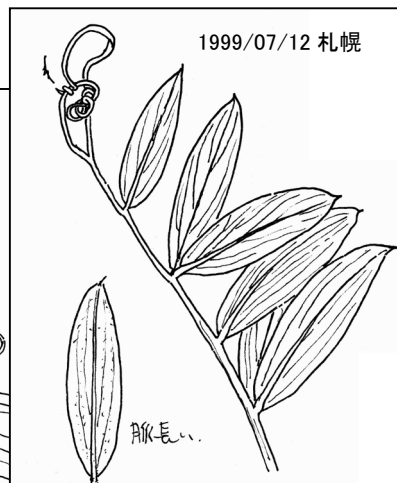
■センダイハギ

海岸の代表選手。三つ葉タイプ。



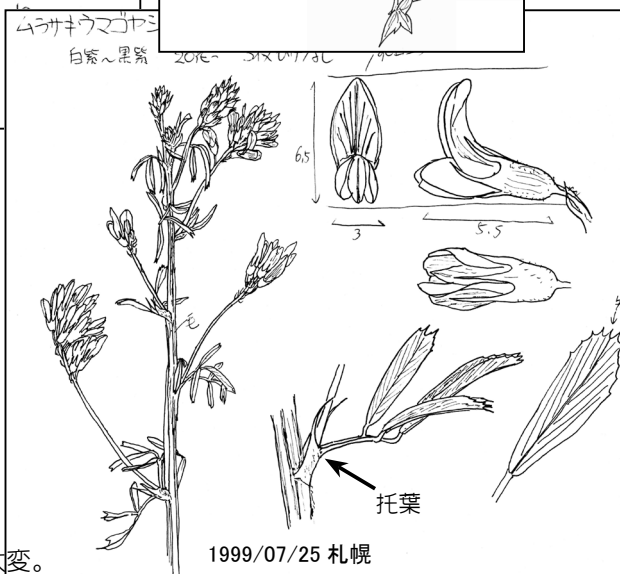
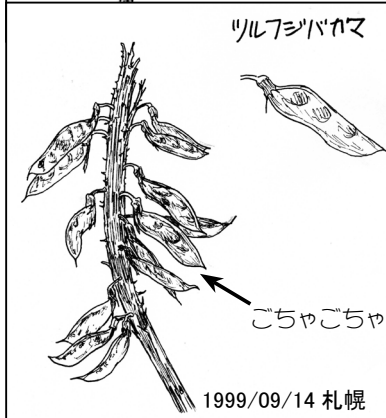
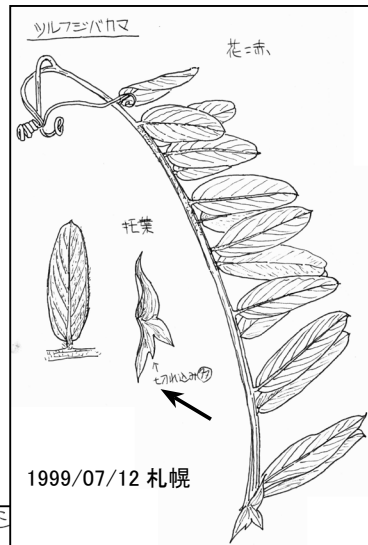
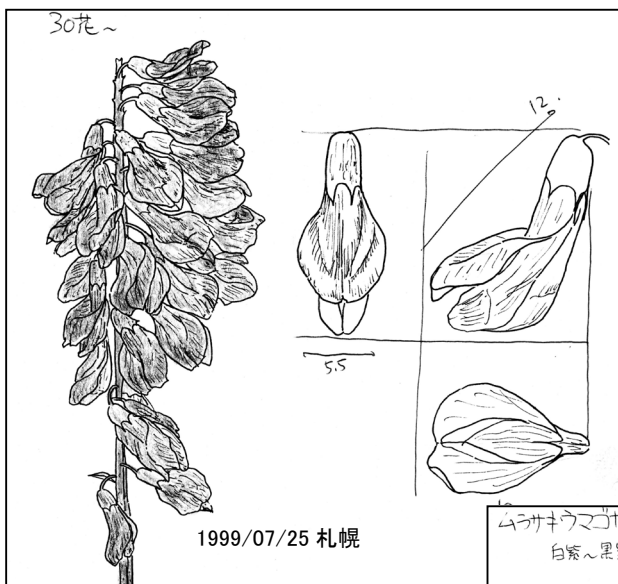
■エゾノレンリソウ

描くのが難しいが、面白い。



■ツルフジバカマ

托葉がポイントの種



■ムラサキウマゴヤシ 描くのが大変。